

重度精神薄弱幼児の発達過程の分析

— 6カ月間の臨床的働きかけを通して —

沼 尾 孝 平

I 問題

本研究は以下にあげる4点の背景をもとに重度精神薄弱幼児（以下、児童と略称する）の発達過程^{*}を分析しその様相を明らかにすることを目的としている。(一)一般社会人の障害児に対する理解が十分に深まっていると言えない。(二)理解を深めていく場合、その一翼を担うと考えられる発達に対する考え方が十分に検討されていない。(三)そうした状態の中に真の発達の捉えに方向づけられていると思われる考えが芽ばえつつある。その場合、発達を「自己と他者との関係の中で各人が能動的に自己を形成していく過程」であると考え。このように発達を捉えることにより初めて人間の多様な存在形態を認容しうる人間観に到達できると言える。(四)以上のもとで、児童の人格の発達を保障する方向の研究は数少なくそれもまだ緒についたばかりの状態であり今後の研究に待たれる部分が多い。

このような現状において、まさに日々、児童とかわりあいを持つ中に、すなわち、児童の人格発達の保障を志向するとりくみの中に児童の発達の様相を明らかにする資料を蓄積していくことは意義あることと考えて本研究にとりくんだ。次にあげる3点を課題として設定する。(A)児童は発達する。(B)発達とは人間の対象世界とのつながりを基盤に持つ社会的事象である。(C)発達にともない、児童の物理的環境は同じであってもその心理的環境は変化する。

II 臨床的働きかけ

II-1 臨床的働きかけ

3つの課題を、毎週1回、3時間の臨床的働きかけ^{**}を児童6名(C_K, C_M, C_E, C_Y, C_H, C_A)を対象として6ヶ月間^{***}継続する中に検討していく。そこに関与するTは男

* 臨床的働きかけの場でTが捉えた児童の変化過程を意味する。

** 以下の3点に重点を置く児童との関与の仕方を言う。1)児童の緊張を解消し自己活動を促進する。2)児童の自己活動が促進されるようにTは関与の仕方を積極的に考えていく。3)子ども同志の相互交流を促進するようにTが関与する。

*** 46年5月11日より40年11月9日までとする。

**** 男子2名は数年の臨床経験を持つ院生2名(含筆者)。女子2名は臨床経験を持たない女子職員である。

表1 行動評定リスト

行動評定リスト	イ	他児への働きかけ
	ロ	Tへの働きかけ
	ハ	Tの働きかけに対する反応
	ニ	他児の働きかけに対する反応
	ホ	T・他児・本児の三者関係
	ヘ	物への働きかけ
	ト	感情の表出
	チ	言語の表出
	リ	食事
	ヌ	排尿
	ル	着衣
	ヲ	移動
	ワ	母子分離

子2名、女子2名の計4名^{****}である。なお、児童の発達の概要は作成した13項目の行動評定リスト(表1)を用いて捉えた。

II-2 課題(A)の分析

(1)問題「課題(A)児童は発達する」を検証する。(2)方法、毎週の臨床的働きかけ終了後に4名のTが中心となり児童6名の状態を把握する。その際、13項目の行動評定リストにポイントすると同時に各項目毎にさらに詳しく自由記述してその動的な様相を把握する。また、隔週にはVTRに児童の行動を収録して観察し、児童の状態の把握をよりの確なものにするように努めている。(2)結果と考察、行動評定リストにより各児童の6ヶ月間の発達の概要を把握した。ついで、各児童の発達を最も特徴的に示していると思われる側面に焦点をあてながら6ヶ月間の発達過程を述べ検討した。それによると、発達に顕著な展開の見られたのはC_K, C_E, C_Y, C_H, C_Aの5名であり、顕著な展開の見られなかったのはC_Mの1名であった。なお、発達に顕著な展開を見せた5名の児童はその発達過程の特徴からC_K, C_EとC_Y, C_H, C_Aの2群に分けることができる。C_K, C_Eの発達過程を表2に示した。その発達過程はその行動を他者との関係の中に徐々に位置づけ、定着させ、発展させていくと同時に自発的、主体的なとりくみを増加させていく漸次的な展開過程である。それは、㉔とじこもりの段階から㉕芽ばえの段階、㉖開かれの段階、そして㉗深まりの段階を経過していると言える。C_K, C_Eに共通していることは次の3点であ

表2 C_KC_Eの発達過程と発達段階

月・日	開所回数	[康]	[恵美]	発達段階
		C _K	C _E	
5・11	1	I 自分本位	I 空虚	とじこりの段階
5・18	2			
6・1	3	II 関係の芽ばえ	II 萌芽	芽ばえの段階
6・8	4			
6・15	5			
6・22	6			
6・29	7			
7・13	8	III 利用	III 定着	開かれの段階
7・20	9			
7・27	10			
8・10	11	IV 発展	IV 解放	深まりの段階
8・24	12			
9・7	13			
9・14	14			
9・21	15	IV 発展	V 発展	深まりの段階
9・28	16			
10・5	17			
10・12	18			
10・19	19			
10・26	20	IV 発展	V 発展	深まりの段階
11・9	21			

る。すなわち、母親と別れることを認知しているのか判然としないこと、基本的な生活習慣の面では殆んど全面的な介助が必要であること、精神発達ではその発達指数がいずれも20前後であることの3点である。次にC_Y、C_H、C_Aの発達過程を表3に示す。その発達過程は非常に動的である。初めは極めて依存的であるが母親と分離した後は、母親以外の他者とのかかわり合いの中に自立を志向していく展開を示す。その過程において一時的な停滞を示すことが特徴である。その発達は①依存の段階から②自立志向の段階、③仮性自立の段階、そして④葛藤（依存と自立）の段階を経過していると言える。さらに④葛藤の段階を乗り越えた所に真の自立、すなわち、C_Aに見られるように⑤自立の段階が位置づけられる。C_Y、C_H、C_Aに共通していることは、母親との分離に極めて強い不安を示しており、まず第一にこの不安を乗り越えることが重要な発達課題となっていることである。そして、基本的な生活習慣の面はC_Mを除いて食事が殆んど自立し、排尿、着衣も協力的であること、さらに、精神発達を考えるとその発達指数はC_Yが34、C_Aが41、C_Hは年令的に幼く、ようやく母親から離れられるようになったばかり

りであることから22と低くなっているが、大方はC_K、C_Eのそれよりかなり高いことがあげられる。C_Mの発達過程は3期に分けられる。その中でⅡ期には特定のTに積極的な関心を示しているがその他に大きな展開はない。Ⅰ期とⅢ期は他者に無関心な時期であるがその内容はそれぞれ異なっている。以上に6名の児童の6か月間の発達を検討してきた。それより、課題(A)は検証されたと言える。

Ⅱ-3 課題(B)の分析

(1) 問題 課題(B)の検証を究極の目標としてここでは「臨床的働きかけの場を通して把えた児童の発達の臨床的働きかけの場の人間的対象世界を構成する人とのつながりを常に持った形で展開する事象である」とする問題を検証する。2つの仮説を検証する。1.児童の発達の展開はTのかかわりの展開を意味する。2.児童の発達に展開がないことはTのかかわりに展開のないことを意味する。

(2) 方法 原則として隔週臨床的働きかけ終了直後に各Tが児童3名とのかかわりをかかわり評価リストに評価する。このリストはTと児童との心の交流の浅く狭い段階より深く広い段階までの6段階で構成される。さらに児童との間に持った体験の具体的な様相とT自身の気持（内的体験）をT自身の言葉で自由記述する。なお、評価はより適当とするもの（主評価）と適当とするもの（従評価）とを選択する。Tと児童の組み合わせは表4の通りである。

(3) 結果と考察 i) 発達に顕著な展開の見られた児童に

表4 Tと児童の組み合わせ

	組み合わせ		組み合わせ	
	T _T (女)	T _K (男)	T _S (女)	T _N (男)
かかわり評価者				
対象児童	C _M	C _E C _H	C _K	C _Y C _A

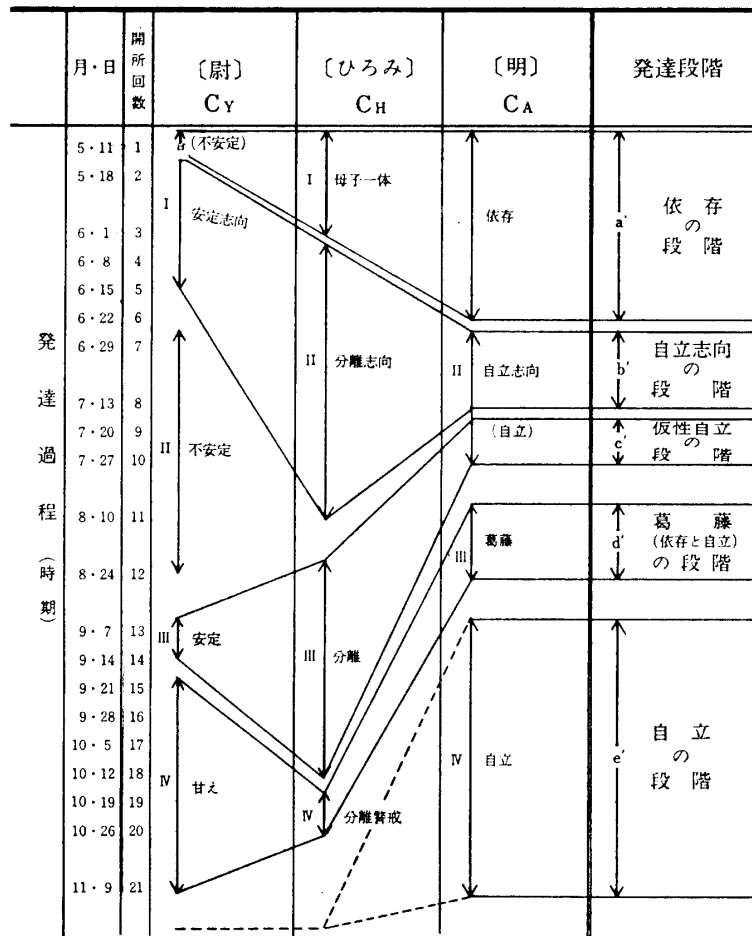
ついて、各児童と各Tのかかわりの始期と終期とをまとめたのが表5である。C_K、C_Y、C_Hの3名の児童に対するTのかかわりは2名のTのうちいずれか1名がそのかかわりを深めているC_Eは2名のTがそれぞれにかかわ

* 「『Tと児童との関係内での心の交流』のTのとらえ」

** 臨床的働きかけを開始する前に決めた。これはTの働きかけが特定児童に集中したりして、いつもTとの関係の少なくなる児童の出ないようにするためのものである。従ってあくまでも原則的なものであり、Tの働きを束縛するものではない。実際の関係の持ち方は非常に流動的であり、より自由である。

重度精神薄弱幼児の発達過程の分析

表3 C_YC_HC_Aの発達過程と発達段階



りを深めている。C_Aは2名のTのいずれもそのかわりを深めていない。C_Aは自閉的特性を持つ児童である。以上の結果から、C_Aという例外を認めることを前提に仮説1は検証されたと言える。ii) 発達に顕著な展開の見られない児童について、C_Mに対する2名のTのかわりに大きな展開は見られない。C_Mの発達過程のⅢ期に対応する時期にT_Tがその関係の展開に期待を寄せている以外、T_T、T_Kは交流の糸口すらつかみえていない。このことから、仮説2は検証されたと言える。以上の仮説1、2の検証からここで問題とした「臨床的働きかけの場を通して把えた児童の発達は臨床的働きかけの場の人間的対象世界を構成する人とのつながりを常に持った形で展開する事象である」ことが検証されたと言える。ただし、このことだけから課題(B)というところの「……つながりを基盤に持つ社会的な事象である」とは必ずしも言えない。今後に残された問題である。

Ⅱ-4 課題(C)の分析

(1)問題、「課題(C)発達にともない、児童の物理的環境は同じであってもその心理的環境は変化する」ことを検証する。2つの仮説を検討する。1) 物(おもちゃ)の

児童にとって持つ意味は児童の発達にともない異なってくる。2) 音楽の児童にとって持つ意味は児童の発達にともない異なってくる。

(2)方法 物と音楽を素材として15分よりなる各々の場面を設定する。中間の5分にそれぞれ物、あるいは音楽を挿入する。(表6、表7) 児童は各15分間、一人のTと自由に遊ぶ。対象児童はC_KとC_Mの2名である。それぞれ46年5月と46年11月に実施する。各15分間をVTRに収録して逐語的記録を作成する。それを丸井文雄他(1971)*の方法により評定分類する。

(3)結果と考察 i) 仮説1について、C_Kの場合、C_Kは顕著な発達の展開を見せた児童である。5月時点は場の変化に対する関心があると考えられるが全体として考える時、物のC_Kにとって持つ意味は稀薄であると言える。11月時点は物への働きかけと人への働きかけを状況の変化に応じて展開している。この事から仮説1は検証されたといえる。すなわち、C_Kの発達にともない、物のC_K

* 丸井文雄他 1971 自閉症に関する研究—VTRによる治療過程の分析—名古屋大学教育学部紀要—教育心理科—18, 61—110.

表 5 Tのかかわりの始期及び終期 (5名の児童)

事 例	T	始 期			終 期		
		かかわり (期名)	かかわり 評定		かかわり (期名)	かかわり 評定	
			主	従		主	従
〔康〕 C ₄	T _S	模 索	3	4	傍 観・関 与	4	3
	T _N	模 索	4	3	<u>深 化</u>	<u>5</u>	4
〔恵美〕 C _E	T _T	困 惑	2	/	<u>深 化 志 向</u>	4	<u>5</u>
	T _K	無 関 心	3	2	<u>深 化 志 向</u>	4	<u>5</u>
〔尉〕 C _Y	T _S	深化志向・当惑	4	3	<u>深 化</u>	<u>5</u>	4
	T _N	ラポート志向	1	/	関 与 志 向	3	4
〔ひろみ〕 C _H	T _T	敬 遠・低 _T 迷	1	2	関 与 志 向	2	3
	T _K	打 診	2	/	<u>深 化</u> *	<u>5</u>	4
〔明〕 C _A	T _S	打 診	1	2	混 迷	3	4
	T _N	嫌 悪	1	2	展 開 志 向	4	3

* C_Hに対するT_Kのかかわりの終期は嫉妬であり、その主評定は4となっている。

表 6 物 場 面

	1 5 分		
	5 分	5 分	5 分
時 間	5 分	5 分	5 分
状 況	児童とT	児童とT (物)	児童とT

表 7 音 楽 場 面

	1 5 分		
	5 分	5 分	5 分
時 間	5 分	5 分	5 分
状 況	児童とT	児童とT (音楽)	児童とT

にとって持つ意味が異なっていると言える。C_Mの場合C_Mは発達に殆んど展開を見てない児童である。5月と11月の結果を比較しても殆んど変化を見出しえない。C_Mの結果は仮説1を否定するものではないが積極的に支持するものでもない。以上、2名の児童の結果から仮説1は一応検証されたと言える。ii) 仮説2についてC_Kの場合。5月時点では音楽はC_Kにとって完全な鎮静作用を持つものである。しかし、11月時点では音楽に対する反応に多様な分化が見られている。この事から仮説2は検証されたと言える。すなわち、C_Kの発達にともな

い、音楽のC_Kにとって持つ意味が異なっていると言える。C_Mの場合。C_Mの動きに殆んど変化を見出しえない。C_Mの結果は仮説2を否定するものではないが、同時に積極的に支持するものでもない。以上、2名の児童の結果から仮説2は一応検証されたと言える。以上の諸結果から課題(C)が検証されたと言える。この事は児童が受動的的存在ではなく主体的に活動する存在であり能動的なとりくみをしている存在である事を確認するものと言える。

Ⅲ 討 論

本研究において3つの課題を検討する中に以下の事柄を明らかにした。すなわち、課題(A)の分析から「児童は一人の人間として生き生きと豊かに発達しつつ存在している存在であること、課題(B)の分析から「児童はその場で関係を持つ『誰か』との心の交流を展開させながら発達すること、課題(C)から「児童は受動的的存在ではなく主体的、能動的に活動している存在である」ことの3点を明らかにした。すなわち、児童は『誰か』と心の交流(つながり)を展開させながら主体的、能動的に活動をして発達しつつ存在している存在であることが明らかにされたのである。この事は問題の項に述べた(≡)の発達に対する考えと支持するものであると言える。これまでに明らかに

重度精神薄弱幼児の発達過程の分析

された諸事実をさらに種々の側面より分析し検討を加えたが、ここでは紙面の都合上省略する。

最後にこのような縦断的なとりくみを実行することができたのは康ちゃん、基くん、恵美ちゃん、峠くん、ひ

ろみちゃん、明ちゃんそれにお母様方の温かな御協力をはじめとする多くの方々のお蔭によるものです。ここに記し心から感謝の意を表します。